

寒山寺で鐘を撞く

蘇州に有名な寺がある。寒山寺

という。ホテルから割と近い。フロントで

タクシーを呼んで貰うと、(時間

貸し切りで百元（ユアン）、日本円で二千円
という。

森鷗外に「寒山拾得」という作品が

ある。一方は石窟に住む隠者、地方は

寺男で世に身をかくしているが、実は
互いに

寒山は又殊、拾得は普賢、ともに

賢者であつたといふどんぐん返しの咄だ。

寒山寺はその隠れ偉人を祭る寺で、

唐の詩人張継の「楓橋夜泊」として

七言絶句で有名である。

月落ち鳥啼きて霜天に満つ
江楓漁火 愁眠に対す
姑蘇城外 寒山寺
夜半の鐘声 客船に到る

この詩はあり、旅人が故郷を想い眠る
夜、寒山寺の鐘の音を聞いた風情を

謳っている。

寺に着いたとき、運転手と一時間後に
ふみ入で会う約束をした。

中に入るといくつもの独立した寺が成る

複合寺院で敷地は実に広い。昨日

留園でも経験したが、外国人は窓口に

パスポートを提示すれば入場無料だ。

目やすは鐘楼だ。

「鐘はどこですか」と中国語で訊く

が通じない。旅行者の知恵、困った

ときは筆談だ。メモ紙に「鐘」と大きく

書くと若者はある方向を指さしてくれた。

一般休憩所の前にはさしつかえなく、家内は

「疲れたから一寸休みたい」と言う。

中国の人は概して冷えた飲みものを好ま

ない。体によくないと言う。
常温の

からだ

茶を入れたやかんが置いてあり、各自

ごく小さな湯呑みで茶を飲む。

立ち上がり、教へられた方向に行くが

鐘楼が見当たらない。今度は

デモンストレーション

「鐘在哪里？」と質問　を紙に書き

再度問うが要領を得ない。

中に親切な若者がいて途中まで一緒に

案内してくれた。寸志を渡そうと

若

者はそれを断り笑って去った。

寒山寺の鐘は中国の地方あらの観光客

にも有名で、鐘撞き料は五元（百日）

で、一人三度まで鳴らせる。一度撞くと

寿命が十年延ぶという。われくは

おのく三度ずつ撞いた。男女の力の差が

私が撞いた鐘の音は強く、息が長く、

家内の音は弱く、短い。だが、

確かに良い音色だ。

鐘樓から降りたとき、目的を果たした達成感があった。

― 帰途また苦勞した。中国の

博物館など公共施設では入口と出口が

大きな

別の場所にあることばかりである。

混雑緩和のためだろうが、来た道を

帰る習慣のわんくわんするとそれが

面倒だ。逢転手とは寒山寺の入口近い

（再会を）

目印の場所で約束した。だから敢て

元来た入口を探しそこから出た。

ところが逢転手がない。

結局約束の時刻より二十分過ぎで

遅転手と再会してきた。寒山寺の前で

そのタウシーを待ち続け^たかれくは

再遭遇に感激——^ていゝのに、彼は

無愛想に「早く乗車しとせかき。」

車内の冷房が快い。

往きは二十分、かゝったのに帰りは十分で

ホテルに着いた。ホテルを出てから一時間

半だ。私はチップを含め二百元を差入

出した。すると運転手は釣りを出品しう

とするので、そのまゝ取っていいと言った。

ず、と無愛想だった彼が初め

笑った。

部屋に戻り早くシャワーを浴び

たい。家内も汗をかいて

「先にシャワーを浴びていいよ」と

声をかけた。

急ぐ必要はないんだ、人生は。

わい／＼は寒山寺の鐘を二度撞き、

三十年寿命が延びたのだわ。

了

令和七年九月二八日記